

黒田明伸 著

『中華帝国の構造と世界経済』

岸本美緒

本書の作者黒田明伸氏が、処女作「清末湖北省に於ける幣制改革」を擧げて学界に登場してから、すでに十二年近い年月が過ぎた。その間、氏の研究対象は、清末省財政の問題から清代中期の経済構造へと廻りつつ拡大し、近年では更に近世における世界大の比較へとその視野は広がっている。問題

てかなりの改変が加えられており、一つの著書としての統一的主張・内的整合性を重んじた書物となっている。全体の構成は、左の通りである。

序 二つの貨幣

前編 中華帝国の昇華と世界経済の始動

I 銀錢二貨制

II 撰錢から錢貴へ——乾隆通宝の登場

III 穀賤から米貴へ——地域資産への傾斜

IV 雜種幣制と本位貨幣制

V 中華帝国と重商主義

後編 世界経済の展開と中華帝国の溶解

VI 辛亥革命への視角

VII 清末湖北省における幣制改革

して、旧套を排し果敢に独自の新概念を提起してゆく姿勢——こうした特質を兼ね備えた氏の作風は、「華麗」という語がぴったりで、氏の論文が発表されるたびに待ちかねて読んだ読者は私だけではないであろう。

本書は、処女作以来の黒田氏の主要論文をもとに構成されており、この十年余りの氏の研究の集大成であるといえよう。しかし、それぞれの論文の内容は氏の現段階の観点に合わせ

—— 広域経済圏への道

Ⅷ 清末湖北省政府の財政改革

—— 中国分省化の選択枝

Ⅸ 世界経済と辛亥革命

X 銀錢二貨制の終焉——分省化の回避

XI 綿糸棉花流通にみる中国市場構造の特質

結 二つの債権

まず、順を追って簡単に本書の内容を要約しよう。

序は、本書のねらいを示し、主要なキーワードを解説した書き下ろしである。本書の要旨は既にここでまとめられているともいえるので、やや詳細にその内容を紹介しよう。

「中国では古くから自由な市場経済が展開していたにもかかわらず、一六世紀以降、どうして世界経済の中枢を占めることができなかつたのか。」この問いに答えるためには、商品化率や労働力市場の成立、工業部門の発展、貿易収支などの指標を個々にとりあげるのでなく、それらを結びつける市場構造の性格を把握する必要がある。個々人の経済活動は自由に放任されているにもかかわらず、貨幣制度の甚だしい不統一が見られ、価格を通じての需給調整メカニズムの働かない伝統中国社会。これを、「均衡型市場経済」に対比して

「非均衡型市場経済」と名付けよう。両者の違いは、「現地通貨」即ち農産物買付に用いられる季節的需給変動の激しい地域内の通貨と、「地域間決済通貨」即ち地域相互の決済に用いられる通貨との関係をどのように統御するかというところにある。中華帝国の場合は、「現地通貨」と「地域間決済通貨」との兌換性を制限することによって、地域経済と超地域経済とを切り離し、地域間決済通貨の過剰流動性による地域経済の攪乱と、現地通貨の季節的不安定性による超地域経済の攪乱との双方を防止しようとした。即ちそこでは、地域経済の完結性——相互の非接合性とそれに基づく全体経済の「非均衡」的性格——の上に、それと切り離された形での、国境をも越える開放的な超地域的経済が展開することが可能となった。それに対し、ヨーロッパでは、現地通貨と地域間決済通貨との互換性を保証することによって、地域経済をより広域的な経済圏のなかに統合していったのであり、財政機構がその統合の核として大きな意味をもった。そのようにして生まれてくる均衡のとれた国民経済が、国家の枠を越えて、非均衡的・非統合的な周辺地域経済を取り込みつつ成長してきたのが、一六世紀以降の世界経済である。「非均衡型市場経済」の道を歩んだ中華帝国と「均衡型市場経済」として成

長した世界経済との競合・相互依存は、二〇世紀初頭において中華帝国の世界経済への「溶解」という形で結末を迎える。

第I章は、前編の導入部として、中国の銀錢、二貨制の特質を概論する。銅錢の特質は、その重さによる地域的流動性の低さ、錢需要の季節的格差の大きさ、であり、地域ごとに膨張収縮を繰り返す需要に対応してかにかに銅錢供給を行うかということが、清朝の直面した課題であった。一方銀は、可搬性に富むが、故意に分立させられた銀兩制度により、互換性が分断されていた。一八世紀半ば以降の銅錢の大量供給によって、「地域間決済通貨」としての銀、「現地通貨」としての銅錢、という機能的分業関係が成立していった。

第II章は、一八世紀半ば乾隆年間の清朝による銅錢大量製造政策を分析する。一八世紀前半の錢不足は、零細な計数性能をもつ通貨に対する需要の増大に基づいていた。その需要に依って乾隆通宝が大量に鑄造されるが、清朝は、専制王朝の国制をゆるがしかなない省レベルの通貨の自律性拡大を防止するため、通貨の全国的画一性を求めて良質性の保持に固執し、また、銅錢を税として徴収することなく行政支出を通じて、錢を一方向的に供給しつづけた。こうした政策は、地方の需要に応じた弾力的な供給という本来の要請とかがみあわず、

結局銅原料不足を招いて、地方鑄錢局による小錢の鑄造や私鑄錢の増大により、統一的銅錢流通は崩壊していった。

第III章では、一八世紀中葉の錢貴の背景が構造的に分析される。この時期には、米貴・錢貴が同時に進行するとともに、常平倉などの穀物備蓄が増大し、かつ倉穀の現地買補方針が確立された。倉穀の銅錢による糶売は錢需要を押し上げ、銅錢の大量供給は銀を地域から駆逐し、銀は地域間決済のみを主として担うこととなった。こうして、地域から追われた銀に対して地域内の資産である銅錢と穀物とが「過高評価」される構造が成立した。清初の開放的な市場経済に対比して、清朝中期には、為政者により無意識的にはあれ、市場経済の展開を非開放的な地域資産形成へと誘導する政策がとられたのである。

第IV章は、清代における「雜種幣制」の意味を考察する。銀は「地域間決済通貨」ではあったが、統一的硬貨に鑄造されず様々な異なる形態をもつ称量貨幣として流通していたため、それ自体互換性に欠けていた。地域的な対外収支は、特定の商品に結びついた特定の貨幣によって個別に決済され、地域経済全体に波及的影響を及ぼすことはない。従って、対外収支を順調に保とうとする重商主義も、そこには生まれな

い。雑種幣制とは、地域にとつての対外債務債権をいわば外貨建てにしておき、現地通貨の需給と切り離す構造の帰結であり、それは地域経済ないし一國経済を全体として統合しつつ対外決済と結びつける本位貨幣制とは対照的な貨幣制度であった。

第V章は、中華帝国の銀錢二貨制の意味を世界的視野のもとに論ずる。一六世紀後半に銀の大量流通に見舞われた各社会は、過剰な対外流動性の処理に苦しみ、それを対内流動性に転換していこうとした。地域経済の不安定性の緩和のため、地域内で流通する小額通貨の大量供給という方策が各地でとられた。一六世紀から一八世紀にかけての東・東南アジアは、当初銀の衝撃を共有したが、やがて、銀を地域収支の鎖から解放した中華帝国、その帝国からの銀流出入を制御した日本・朝鮮・ベトナム、及び制御せずに銀と華僑のネットワークを受け入れた他の社会とに三分される。一八世紀日本における錢遣いの進展は清朝と共通するが、日本の場合、地域権力が貨幣需給を管理し、自ら経済変動に即応して積極的に利潤を追求する「企業型」の対応をとったのに対し、中国の場合は、租税を商人に預けて運用させ、レントナーとしてその利子をとる「財団型」の対応をとった。積極的な「営業」

の必要に迫られていた日本の公権力と比べて、中国の場合は、公権力が地域経済を制御し統合しようとする動機に欠けていた。

以上、一八世紀における銀錢二貨制（即ち地域経済における対内流動性と対外流動性との分離）の成立を扱った前編に対し、以下の後編は、二〇世紀初頭を中心に、銀錢二貨制の終焉を取り扱う。第VI章は、後編の視角を①国際金本位制を成立させた世界経済と、同時期の中国の経済変動との連関、②その連関に対し中国王朝が対応し得る条件があったか、③財政改革の基礎条件となった中国の市場構造の特殊性、の三点にまとめる。

第七章は、張之洞によつて推進された清末湖北の当千銅元・官錢票発行政策を取り上げる。この政策は、悪性インフレの元凶として後に悪評を被ったが、実際には、当時の錢不足に際して現地通貨として受領されうる新しい流通手段を提供するとともに、多額の鑄造利益を省にもたらした時宜を得た政策であった。その背景には、大陸ヨーロッパを中心とする工業原料用農産物需要の高まりに牽引された、漢口からの農産物輸出の急速な拡大があった。農産物買付に必要な錢需要に応える形で、省政府により、自律的な現地通貨圏が形成され

ることとなったのである。

第Ⅷ章は、通貨改革により財政的自律性を獲得した湖北省がその財源でどのような改革を行ったかを述べる。湖広総督張之洞は、戊戌政変後の財政保守主義に対抗しつつ、土業・鐵捐・銅元鑄造差益といった特別財源に依拠した積極的な財政膨張策をとり、軍事建設や漢口後背地開発などの新政を推進してゆく。中央財政・省財政・州県財政のうち、当時は多額の租税外収入をもつ省財政が最も経費膨張に対応できる弾力的構造を有していた。非弾力的な「財団型」の王朝財政では、急激な財政膨張の要求に対応することが困難であった。湖北を典型例とする「開港場経済」の発展に支えられた省政府の通貨供給能力と独自財源創出は、清末から民国にかけての権力の分省的展開の基礎となったが、同時にそれは、市場・資本の地方的局限という点で、限界をもあわせていた。

第Ⅸ章は、以上の論点を世界経済との具体的関連において論ずる。一八九〇年代以降、ドイツ重化学工業の発展とともに、その原料としての第一次産品価格が急激に上昇した。漢口から輸出された胡麻はその一例である。アルゼンチン・インドなど農産物輸出国では、農産物商品化の急激な増大に伴って貨幣需要が増大し、弾力的供給が可能な紙幣などの統一的

通貨によって、従来の現地通貨が代替されてゆく。中国でも、第一次産品供給国としての世界経済への編入により、旧来の国内地域分業は断ち切れ、開港場を中心として地域経済を越えた農産物集荷機構としての広域通貨圏が形成された。中国は外向的な広域経済圏が並列する形で、国民経済としては非統合的にかつ不均等な発展の道を歩み始めたのである。この分省化の動きの中で、各省独立という形での辛亥革命が必然化された。

第Ⅹ章は、一九三五年の幣制改革以前、二〇世紀第一四半世紀の貨幣流通状況を考察し、この時期の幣制が通説のような無政府的状况であったのではなく、袁世凱銀元と中国銀行券の普及により、統一への過程が進行しつつあったことを指摘する。その過程で漢口銅貨圏も崩壊するが、その背景には、ヨーロッパによる第一次産品の需要牽引力の減退、及び輸入代替工業の進展による国内的結びつきの強化があった。省レベルで形成されかけた広域経済圏は、傘下の地域経済を完全に吸収統合する以前に瓦解したのであり、その結果、中国市場の非均衡型市場経済としての特徴は、通貨統合の後も残存することとなる。

第Ⅺ章では、この非均衡型市場経済としての特徴を、綿糸

棉花流通を題材に論ずる。在来棉業の構造の一つの特色は、原棉在庫の非組織性である。手紡工程の市場化が進展しなかつたため、市場条件によって、棉花の自家消費あるいは購買による手紡への復帰が可能であった。原棉調達の困難さは、「花貴紗賤」現象として、中国紡績業を苦しめた。また、農産物商品の在庫の非組織性は、買付に当たつての大量の小額通貨の保持を必要ならしめ、錢相場の緊張を回避するため、機械製綿糸のような新商品の売り込みと農産物買付とを組み合わせる方式もとられた。価格変動に敏感に反応しながらも非組織的・分散的な中国小農経営のあり方は、非均衡型市場経済に立脚する中華帝国の構造の反映である。

結論は、本書の論旨をまとめつつ、一六世紀後半以降の「世界経済」と「中華帝国」とのあり方を次のように表現する。当時期の国際的銀流通を通じ、既存の様々な請求権（交易・貸借関係のみならず租税などの一方的なものも含む）の間に互換性が形成されてきたが、その互換性のつけ方に二つの方向性があった。中華帝国は、その内部で各種請求権に互換性が保証されるような完結した空間の形成をこばむ世界であり、現地通貨と地域間決済とを分離することによって、二者間の信用関係が帝国の版図をも越えて開放的に広がってゆ

くことを可能にした。一方、請求権の宛先を行政空間内で集中させる方向をもつた社会が重商主義国家として成功して行く。西欧諸国、日本などを例とするこうした国家内では、「二物一価」の統合された国民経済が成長する。そうした均衡型市場経済が成立せず、価格平準化メカニズムの働かない地域経済が分立していた中国では、比較優位原則による地域間分業が発達せず、国民経済の成長が阻害された。それは、自由な市場的営為を抑圧する中華帝国の前市場的体質によるのではなく、逆に国民経済形成の積極的動機を持たず自由な交易を放任したその公権力の市場に対する中立的態度に起因する。

以上、誤読もあるかもしれないが、私の理解し得た限りで、本書の論旨を紹介してきた。不手際な要約ではあるが、スケールの大きな、論理的緊張感のある氏の行論の一斑を示し得ていれば幸いである。

さて、黒田氏の視角の特徴と思われるところを、以下にまとめてみよう。第一に、氏の当初よりの特徴の一つとして、経済成長の問題を、商品流通の発展や賃労働の拡大といった部分的指標でなく、それらを結びつけるシステム、市場構造の問題として解いてゆこうとする視角がある。それは無論、

黒田氏のみの特有のものというわけではなく、黒田氏の引くウォーラー・ステインなどの世界システム論はもとより、戦後

日本の経済史学を規定したともいえる大塚史学こそが——「近代」の評価において世界システム論とは対極に立つとしても——まさにこのような方向性をもっていったのだ。近代的経済発展の眞の動力をコスモポリタンな商業資本の「自由」な活動の量的拡大と峻別しようとする視角。「一物一価」の成り立つ統合された均衡経済の起源と展開への関心。求心的な国民経済の形成を支える「固有の重商主義」への着目——「大塚史学」のこうした特質とひびきあうものを本書の中に感ずるのは私だけだろうか。商品流通や賃労働の展開から直接に「資本主義の萌芽」を検証しようとする中国の研究と異なり、戦後日本の明清く近代中国経済史研究は、主に商品経済と地主的土地所有（の展開ないし解体）との関連に注目することによって、当時期の経済を「構造」的にとらえようと試みてきたといつてよいであろう。しかし、本書のように、「市場構造」そのものを正面にすえ、明確な比較の視野をもってこの問題を理論的に論じようとした専著は今まであっただろうか。その意味で私は——黒田氏自身の意図には反するかもしれないが——、戦後日本経済史学の如上の問題関心をあ

る意味で正統的に継承した研究として、本書を位置づけたいと思うのである。

第二に、黒田氏の処女作以来の特徴として、市場構造の問題を、行政権力による財政政策・貨幣政策の側面からとらえてゆこうとする明確な視角がある。一九八二年の氏の処女作には「経済装置としての省権力」という副題がついているが、氏は当初より、純粹経済史と政策史とを区別することなく、まさにその当時の経済問題と格闘する行政権力のあり方と不即不離の問題として経済構造の問題を考えてきたと思う。氏の経済史は即ち国家構造史でもある。

黒田氏は、清末湖北省の財政改革から出発して、地域的経済統合の問題を、清朝中期に遡って考察しようとした。それが第二章・第三章のもとをなす一九八七・八八年の論文である。そこで氏は、清朝中期における小額通貨⇨銅銭の価格上昇と流通拡大という甚だ興味深い問題に炯眼にも着目し、清朝の通貨対策の歴史的意味を考察した。私見によれば、この両論文では、小額通貨によって支えられる地域経済の活発化——その結果としての錢不足——に対する清朝の対応は、いささかアンビバレントな形で捉えられている。即ち清朝は清末湖北の如く地域自律的・弾力的な貨幣供給によって銅錢不

足に対処するのではなく、「非市場的原理」に出自する全国画一的制錢の非弾力的供給に固執してその結果却って制錢流通の崩壊を招いた。しかし清朝の主観的意図とは別個に、その穀物備蓄政策や貨幣政策は、帝国のよって立つ超地域経済を支える銀に対して銅錢や穀物といった地域資産を過高評価させ、非開放的な地域経済の形成へと導く客観的效果をもって、と。この当時の黒田氏の議論の主軸は、超地域的な帝國経済の枠組と、その中で成長してくる地域経済との対抗にあったように見える。しかし、その後、「銀錢二貨制」の把握を中心として黒田氏の見解は新たな展開を見せる。

「銀錢二貨制」論においては、議論が一段立体化し、地域経済か超地域経済かという対比よりもむしろ、地域経済と超地域経済との特異な関連の付け方にこそ「中華帝国」の構造的特質があるとされる。そしてここに、本書の第三の、そして最大の特徴がある。清朝の貨幣制度が銀と銅錢との二本建てであったことは常識だが、その二本建てたる理由は、高額取引銀、小額取引銅錢という単純な機能的分業によって説明されるか、或いは進んだ貨幣と後れた貨幣と——長距離交易を可能にする銀と、便利な計数貨幣として基層社会の商品化をささえる銅錢とのどちらを進歩的とみるかは別として

——の過渡期的併存状態として説明されるのが一般的であったといえよう。しかし黒田氏は、銀錢二貨制の、より構造的な存在理由を、世界史的視野のもとで説明しようとする。なぜ清朝では、このような一見非効率的な多重的通貨制度が採用されたのか。その実、一六世紀以降の世界諸地域では、銀の国際的な大流通に表裏する形で、地方的に流通する小額貨幣を発達させてきたのであり、清朝の銀錢二貨制は決して孤立した事例ではなかった。その背景には、銀を媒介とする長距離交易における急速な流動性の増大が農業社会に与えた衝撃及び正負二重の影響が存在する。長距離交易の活発化は地域社会内部の交易を促進し流動性を増大させたが、その一方、外部経済との結合による過剰流動性はしばしば地域経済にとっての不安定要因ともなった。問題は、超地域経済か地域経済かではなく、その両者の関係、即ち地域経済内部の流動性と外部の流動性とにどのように関連をつけるか、という点にあった。黒田氏によれば、中華帝国のとった対応——地域経済と超地域経済との切り離し——は、商品経済自体に対する反動的抑圧ではなく、対内流動性と対外流動性との矛盾に無理なく折り合いをつけようとする合理的対応の、一つの典型例であった——それが結果として、地域的分業の形成による国民



経済の統合性の深化を犠牲にするものであったとしても。

貨幣というものを実物商品経済の表面にかぶさってくる単なるヴェール、一般的流通効率の拡大の手段として平面的に捉える見方もあろうが、本書の方法は、その対極にあるものである。銀流通の衝撃のなかで、グローバルな経済、地域経済、一国レベルの経済など、経済統合の様々なレベルがせめぎあっていった一六世紀以降の、「近世」と呼ばれる時代。現代から振り返ってみれば、それは「国民経済」形成（ないしその失敗）史として明快に整理できるものかもしれないが、当時においては混沌とした諸システム間対抗の過程であった。本書において、貨幣制度とは、そうした諸システム間対抗の体現者であり、それを分析するための最も重要な鍵なのである。本書は、貨幣という視角を通じたまさにダイナミックな経済史研究である。面白いとしかいいようがない。

しかし、黒田氏の構築した議論の全体的構成にはほればれしつつも、その建築物を構成する一本一本の柱、一本一本の梁についていえば、そこには必ずしも納得しきれない、或いはそれ以前に理解不能であったところも多々あることを告白せねばならない。

第一に、黒田氏のいう「地域経済」の内容についてである。

地域経済という場合の「地域」については、次のように定義されている。「固有の変動特性（季節的変動など——引用者）をもった媒介物循環によって交換を維持された空間のことであり、右に述べた現地通貨が受領される範囲のことを想定している。あえて可視化させると、中国では県、江南など、ところによってはその下の鎮、インドでは郡 *parwana*、日本では藩といった、人口数十万を上限とする空間である」（一二頁）と。そもそも、人口数十万を上限として、固有の貨幣循環を共有し、「商品の需給が、より広域な需給からは独立して、地域内で閉じた均衡をなす」（三一九頁）ような、そうした完結した空間が清朝中国において実証的に検出できるであろうか。近年の明清史研究において、「地域」という語の曖昧さを逆手にとつて、そこに方法上の戦略的意義を付与しようとする動向のあることは、私も重々承知している。しかし、本書の文脈では、こうした「地域経済」が実在し、超地域経済との間に明確な境目を構成する、ということを基礎に議論が立てられているのであるから、「地域経済」そのものの存在についてのより十分な実証が必要ではないか。地域経済の範囲はなぜ「人口数十万を上限とする」「県」や「鎮」に特定されるのか。スキナー氏の有名な「標準市場圏」や

「大地域」に匹敵するような、論理的かつ経験的な説明が期待される。

黒田氏は、清末の地域経済について「われわれの常識を超えた現象」として、「豊作のため相場が上昇する」「不作なのに廉価」といった観察記述がしばしば見られることを挙げる。確かに当時、豊作時の価格上昇、不作時の価格低落といった一見矛盾する現象は珍しいことではなかった。しかしそれ自体は、外部需要の動向などによって説明され得るものであり、特に不可思議な現象ではない。「常識を超えている」とすれば、それは、「豊作による価格上昇」といった因果連関が当時の人々にとって「常識」であった、ということにおいてであろう。しかし、当時の人々は本当に「豊作のため、相場が上昇する」ことを当然と考えていただろうか。「豊作のため相場が上昇する」という引用の原文は、劉大鵬『退想齋日記』の「率皆豊収、而日米糧価又漲」という文なのだが、この「而」を「ため」と訳すのは、些か訳しすぎではないか。むしろこの「而」「又」という字には、逆接・意外の語気が含まれているというべきであろう。

黒田氏は、こうした供給と価格との逆説的關係が、地域経済のメカニズムから説明可能であるとする。その論理は二種

類あり、大略次のようなものである。(1) 現地通貨は地域内の有産者の手に分散貯蔵され、収穫時の売買に必要な貨幣需要の多寡に応じて引き出されるが、その貨幣調達速度が、出来高に對して一次関数でなく複次式である場合、出来高の上昇率以上に貨幣流通速度が上昇するので、価格は上がる。(2) 地域内産品(例えば米)が豊作でかつその増加供給分にも買手がついた場合、売買に必要な銅銭の需要が高まって、銭高銀賤傾向となる。その結果、外部から移入される商品(綿布)の銭建て価格は割安となるが、銀銭の兌換性に不安があるので綿布の売り手は低落した価格で売ろうとせず、むしろ米の相場を引き上げる形で交換しようとする。その結果、現地産品価格が上昇する、と。これらの論理はいずれも私にはよく理解できないものである。なぜ、(1)において、貨幣調達速度は出来高に對し複次式の關係になるのか。(2)における綿布の売り手はなぜ、綿布を安く売ることが承知しないのに米を高く買うことは承知するのか(同じことではないか)? そもそもこの論理は、外部需要の増大(「増加供給分にも買手がつく」)を前提として始めて成り立つのであって、外部需要が不変であればやはり豊作は価格低落を招くのではないか。

地域経済のメカニズムをめぐるこれらの問題は、本書全体の論旨から見ればいずれも小さな問題にすぎないが、煩を厭わず述べたのは、黒田氏のこうしたかなりややこしい説明が、全体として、中国の地域経済の「奇妙さ」を過度に強調する結果となっているように思われるからである。事態そのものが複雑なら説明が複雑になるのも当然だが、黒田氏は、単純な事態をことさらに複雑に説明していないか。

第二に、「地域経済」と外部との関係について考えよう。

黒田氏がしばしば強調されるのは、中華帝国においては、現通貨と地域間決済通貨との間の兌換性に制限が加えられ、それによって、地域経済の完結性が保たれていた、ということとである。兌換性の制限とは、氏によれば、地域内の貨幣需給の逼迫時に通貨を弾力的に供給し得ないこと（一三頁）である。すなわちそれは銀錢比価の変動となって現れ、それが地域経済を外部から守る障壁となる。しかし、銀錢比価の変動が対外流動性と対内流動性とを切り離す具体的な効果はどれほどのものであったのか。そしてまた、兌換それ自体に対する規制はあったのだろうか。全体に黒田氏は、例えば「(庫平両や海関両は)民間で使用されているさまざまな銀両単位とは直接の交換性がなく」(二六頁) 或いは「(多様な虚

銀両について)故意に分立させられた銀両制度により交換性が分断されていた」(三六頁) というように、そこに換算の手続きが必要であれば直ちに交換性の欠如を主張するきらいがあるように思われる。しかし、今日の我々からみれば煩雑にみえるこうした換算の手続きが日々大量迅速に行われ、盛んな商品経済を支えるに十分な働きをしていたという、その謎を解明しようという問題の立て方もあるのではないだろうか。

黒田氏によれば、非均衡型市場経済のもとでは地域内の商品需給が孤立的に調整されるが故に、供給不足は極端な需給逼迫を地域にもたらし、食糧暴動を惹起する、という。「従来『底の浅い商品経済』と研究者が意識してきたのはこうした構造の所為なのである」(三一九頁)と。しかし、むしろ逆に、従来の研究が明らかにしてきたのは、地域外への食糧流出をきっかけとする——外部の収奪に対する抵抗としての——食糧暴動の姿であり、安部健夫氏などのいう「底の浅い商品経済」とは、移出により商品がすぐに底をつくような性格をさしていたのではないか。六四〜六五頁で述べられているような、地域間摩擦としての清代中期以前の食糧暴動の性格は、乾隆年間の「中華帝国」構造の成立を境にはっきりと

変わったと言えるのであろうか、実例を示していただければ有難い。

黒田氏は、ケインズの重商主義論の背景にあるような「対外収支が域内の経済因子に次々と連鎖的に影響していく構造」(三二七頁)が中華帝国には存在しなかったという。果してそうだろうか。例えば生糸や綿布などの移出産業をもつ地域を考えてみよう。移出商品に対する需要が減った場合、生産者の収入は減り、地域内日用品などに対する支出もそれに応じて減り、連鎖的な収入の収縮が起こらないであろうか。こうした外部需要の影響力は、貨幣制度のクッションのみでは到底防ぎきれないものではなからうか。黒田氏は、地域経済の自律性を強調する一方で、「地域全体の出超入超が好不況をもたらす」ことは認めている。「銀の出入が超越的であることが、むしろ好不況を地域を超えて波及させることになる。そのため地域間の価格体系の較差が解消されないまま、国際市場などの外的条件の変化に対しては意外なほどの同調を示すのである」(二四一頁)。ここでいう「好不況」とは何なのか。それは収支の連鎖を通じて地域社会の内部まで及んでゆくものではないのか。黒田氏の見解を伺いたい点である。

「外のさまざまな地域へのさまざまな債務が、お互いに互

換性をもつことなく」「対外収支は、いわば一個人対一個人の関係で均衡がはかれる」(一三三頁)などの記述から察するに、本書では、「移出地域への債権を移出先地域からの商品移入で消化する」(一一三頁)ような、二者間で完結した取引関係が想定されているように思われる。それは、中国における銀の流れが、二地域間のピストン運動の、相互に有機的な関連を持たぬ集積として把握されることを意味しよう。しかしそうした状況のなかで、いかにして「好不況の地域を超えた波及」があり得るのか。「集中」はしていないかもしれないが、取引関係を通じて次々と「連鎖」していく全国的な銀の流れがあればこそ、黒田氏の言うように、「国際市場などの外的条件の変化」が全国の景気に影響を及ぼし得たのではないだろうか。

第三に、清朝経済の歴史的推移という観点から考えてみよう。黒田氏は、所謂「中華帝国」的経済構造の完成を一八世紀半ば乾隆年間に求めている。第三章冒頭で論じられているように、それ以前の「地域経済」はむしろ非完結的で、外部需要により激しく変動させられるものだったのである。黒田氏は、乾隆年間において、「相互に代替性にとむ銭と穀物という地域的資産が、超地域資産たる銀に対して過高評価され

る構造を、穀物備蓄制度と制錢の追加供給が造りあげた」(八六頁)とする。錢貴・米貴・備蓄政策という三者の同時性の発見は、黒田氏の鋭い着眼点である。しかしこうした状況は、一九世紀の道光年間に崩れていくことにも着目すべきである。錢賤と備蓄制度の崩壊という道光年間の状況は、「地域資産過高評価」構造の解体を示していないだろうか。

黒田氏は、道光年間の銀流出期における中国の経済状況につき、「現地通貨による農産物価格表示は非常に安定しているた」(九一頁)と述べ、銀流出にもかかわらず地域経済が安定を保ったことを強調している。しかし、この時期の地域経済の安定度は、錢建て物価のみで測れるものであろうか。この時期中国の広い範囲を覆った不況感は、多くの研究で指摘されているところではないか。

問題は、乾隆年間の諸政策は、その後一九世紀を通じて続く「構造」を成立させたのか、或いは数十年単位の経済波動の一面の産物なのか、という点である。私には、後者の解釈の方が妥当であるように思われる。米貴のなかで農村に貨幣が流れ込み、農村の小口取引が活発化すること、それに伴って銅錢需要が高まること、一方米貴への対応のため、政府は食糧政策に力を入れざるを得なかったこと、これらは「地域

資産過高評価」構造の成立、といった込み入った解釈を行うまでもなく、インフレ状態の自然な帰結として単純に説明できるものではなからうか。

概して黒田氏は、一八世紀半ばの清朝の経済政策の意味を重大に、かつ複雑に解釈しすぎる反面、道光年間の経済問題については、あまり注意を払っていないように思われる。

「非開放的な地域資産形成への誘導」といっても、穀物流通の大部分を占める民間流通には殆ど規制はなかったわけであるし、穀物以外の商品についても同様である。地域経済の外部依存度がこの時期急激に変化したといえるであろうか。道光年間に至り、地域経済の外部依存性は、清初康熙年間と同様の「不況」問題を引き起こすのではないか。黒田氏によれば中華帝国は対外収支の均衡に無関心であったとされるにもかかわらず、「漏卮」の危機がこの時期叫ばれるのは、何故なのだろうか。

最後に、本書の用語法につき、若干気をついたことを述べたい。「均衡」「重商主義」「貨幣数量説」等々、作者の使用する経済学・経済史用語の中には、普通用いられる意味と多少ずれている——或いは本来多義的な言葉の一部の側面を強調して使っている——ものがあるように思われる。ここでは

無論、黒田氏の言葉の使い方が「間違っている」などと批判しようとするのではない。むしろここで言いたいのは、いくつかの言葉に対して私自身一種の思い込みがあり、それが本書の理解を些か難しくしていた、という発見であり、またそういうズレのなかに、必ずしも十分に解きほぐされていない興味深い問題が潜んでいるのではないか、という想像である。

例えば「均衡」という語について見よう。黒田氏は、「均衡型市場経済」と「重商主義」とを結びつけ、「非均衡型市場経済」たる中華帝国において「重商主義」が欠如していたことを強調する。実のところ私には、「均衡」という語と「重商主義」という語が漠然とそぐわないように感じられ、そのために「均衡型」「非均衡型」という黒田氏の用語を当初誤解していたのであった（現在でも正しく理解しているという保証はないが）。それは私が、古典派均衡、ケインズ（及び重商主義）≡非均衡、といった枠組にとらわれていたからであろう。この枠組においては、市場経済そのものの内部的調整力、バランスのとれた分業形成力を認めるか否かが、均衡と非均衡との分岐点となる。「均衡」経済においては、外国貿易や国家の干渉によって始めてバランスが保たれるのではなく、むしろ自ずから生成するバランスのとれた分業関

係、その延長上に余力が外国貿易となって流れ出、既に均衡した市場経済に対する国家の中立的な調整・保護があるのでなければならぬ。そして大塚久雄氏の局地的市場圏論の場合、そうした「均衡」経済の原点は、外部から自立した完結した地域経済の内発的成長に求められていた。その一見自給的とも見紛う完結性こそが、その内部での自然な均衡を保証する鍵とされていたのである。

それに対し、黒田氏の場合、「均衡」経済を作り上げていくのは、まさに行政権力の積極的な介入でなければならない。黒田氏の「地域経済」は、所謂自給自足的な共同体のものではなく、むしろ自由な市場経済であるにもかかわらず、内発的成長の芽をもたない。中国における「均衡経済」成長の契機は——十分に発展することなく終わったとしても——、清末の「開港場経済」に求められる。行政権力の積極的な介入と農産物輸出への依存を特質とする「開港場経済」こそが、「均衡」経済を創出する。

「均衡」経済に対し、どちらもプラスの価値——といって悪ければ、真の経済成長へとつらなってゆく方向性——を付与しているにもかかわらず、こうしたイメージのズレが存在することは、何に由来するのであるうか。おそらく、大塚氏

の場合、「自立的発展」の含意が、単に他国に対して自立し強力になることばかりではなく、むしろ、国家・行政権力に対しての自立でもあったことが、市場経済そのものの調整力——市民社会の基盤としての——への注目として現れたのではないかと思われる。そのような内部成長経済⇨民主主義体制と、例えば国内市場を犠牲にして強行される資本主義化やモノカルチユア経済に立脚する開発独裁との間に、大塚氏は明確な境界線をひくのだ。そこには、「二つの道」に関する

すぐれて戦後日本的な関心があるように思われる。それに對し、黒田氏の議論においては、その境界線は——そしてそういう問題関心そのものが——殆どない。そこにあるのは、「帝国」と「国民国家」との対比であり、「均衡」とは「国民経済」（およびその延長上にある「世界経済」）一般の特色なのである。

無論これは、どちらが正しいという問題ではない。本書は大塚史学的問題関心のある意味で継承しているのではないかということをしきりに述べたが、本書は大塚史学と切り結び得る枠組を持てばこそ、その相違もまた明確であると言えるかも知れない。私は、本書を読むことによって、私の中に無意識に定着している大塚史学的関心、そのある意味での特殊性

を自覚させられた。本書の時期的対象はほぼ一九三〇年代の幣制改革で終わっているが、その後の中国の経済建設のゆれ——閉鎖的社会主义経済か開放的商品経済化か——は本書の延長上にどのように評価されるのか。伺ってみたい点の一つである。

以上、私の能力不足による誤解も多々あるであろうが、率直な感想を述べてきた。本書を手にする読者は恐らく、用語や文章が非常に難しいという印象を持つであろう。私もその一人である。一般に、用語や文章の難しさは、難しい問題とひたむきに取り組んで自分の思う所を妥協なく表現しようとする若々しい情熱の所産であることもあれば、ことさらに難解な用語を使うことによって一種の神秘化を行い、読者の批判を封じようとする逃げの姿勢の表現であることもある。本書の場合は前者である。難解な本書と取り組むことによって、私自身の考えを整理しえたことを感謝するとともに、批判の未熟さに対すご海容と反批判とを期待したい。

一九九四年二月 名古屋大学出版会

A5版 三三七頁 六一八〇円

(きしもと みお 東京大学文学部教授)